

2021 年 2 月 7 日（日）「細き道を行け」

《聖書協会共同訳》コヘレトの言葉 7:15-18

15 空である日々に、私はすべてを見た。義のゆえに滅びる正しき者がおり、悪のゆえに生き長らえる悪しき者がいる。

16 あなたは義に過ぎてはならない。賢くあり過ぎてはならない。どうして自ら滅びてよかろう。

17 あなたは悪に過ぎてはならない。愚かであってはならない。あなたの時ではないのに、どうして死んでよかろう。

18 一方をつかむとともに、他方からも手を離してはならない。神を畏れる者はいずれをも避ける。

《新改訳 2017》伝道者の書 7:15-18

15 私はこの空しい人生において、すべてのことを見てきた。正しい人が正しいのに滅び、悪しき者が悪を行う中で長生きすることがある。

16 あなたは正し過ぎてはならない。自分を知恵のありすぎる者としてはならない。なぜ、あなたは自分を滅ぼそうとするのか。

17 あなたは悪過ぎてはいけない。愚かであってははいけない。時が来ないのに、なぜ死のうとするのか。

18 一つをつかみ、もう一つを手放さないのがよい。神を恐れる者は、この両方を持って出て行く。

【序論】

「狭き門をくぐり、細き道を行け」。これは主イエスがすべての弟子に向けて語っておられる真理です（マタイ 7:13-14）。救いの門は、それを見つけること自体が難しいほど小さく、見つけたとしてもこの世の荷物をいっぱい背負ったままではくぐることはできません。「この世の荷物」とは、この世を愛する心であり、古い自分の性質のままで生きていこうとすることです（表現は色々あります）。今日のコヘレトの言葉に照らして見るならば、「人を裁く心」と「罪に支配された心」と言い換えることもできるでしょう。キリスト者は罪を捨て、古い自分に決定的な別れを告げて救いの門をくぐりました。そして、そこから天国へ続いていく道もまた安易なものではなく、両サイドが崖となった細き道から転落しないように、ゴールをしっかりと見据えて歩いていく人生であります。その「細き道」を理解するうえで私たちは常に自己吟味を続けなくてはなりませんが、今日のコヘレトの教えはその試金石となるでしょう。「義に過ぎてはいないか」「悪に過ぎてはいないか」という二つの問いが発せられています。これは簡単に理解できる言葉ではありません。読者に考えることを鋭く要求してくる御言葉です。

【本論】

本論 1. 義と悪

空である日々に、私はすべてを見た。義のゆえに滅びる正しき者がおり、悪のゆえに生き長らえる悪しき者がいる。(7:15)

今日のポイントとなる「義」(צִדִּיק)と「悪」(רָע)という二つの言葉が出てきます。コヘレトはこの世界で起きている逆説的現象(パラドックス)をまず読者に呈示している。人が思い描きやすいのは、正しい者が栄え／悪が滅びる「勸善懲悪」のストーリーでしょう。多くの映画やドラマの構成はそうになっており(半沢直樹などは典型か)、子ども向けのアニメは正義と悪が明確化されています。とはいえ、最近の仮面ライダーなどの作品は手が込んでいて、正義の中に悪が隠れていたり、悪が正義に寝返るという要素が少なからず盛り込まれており、大人が見るにも考えさせられるものになってきています。

実際、人間の世界には「義」と「悪」が入り混じっているものであり、光と闇の区別がつきにくい現実がある。コヘレトは「義のゆえに滅びる正しき者」と言うときに、何を伝えようとしているのでしょうか。この部分はいくつかの訳の可能性がありますので、念のため確認しておきたいと思います。「のゆえに」と訳された前置詞「ベス」をどう捉えるかで意味が若干変わってくるのです。

- ①譲歩(にも拘らず)→「正しく生きてきたはずなのに…なぜ？」
- ②手段(を通して)→「正しさを貫いた結果、名誉の死を遂げた」
- ③共格(の中に)→「正しくあり続けたところ、滅びに至ってしまった」

いずれの解釈を取っても、逆説を拭い去ることはできません。実際、聖書には正しく生きてきた人が悪によって滅ぼされる事例が多く出てきます。

- ・ アベルはふさわしい献げ物を神にささげた結果、カインに殺されました(創世4章)。
- ・ 祭司アヒメレクはダビデをかくまった結果、妬みに燃えるサウルによって殺されました(Iサムエル21～22章)。
- ・ ナボテは先祖のゆずりの地を守るためにアハブ王の願いを断った結果、アハブの妻イゼベルによって殺されました(I列王21章)。

これらの事例は氷山の一角です。悔い改めを宣べ伝えた結果殺された多くの預言者がいます。そして、私たちの主イエスこそ正しさの中で殺された際たる実例と言えましょう。この世界にあっては、勸善懲悪は理想とされながらも、実際には真逆のことが起きているのです。この「義と悪」にまつわる問題は、16～17節で更に進展していきます。

本論 2. 大きな義

あなたは義に過ぎてはならない。賢くありすぎてはならない。どうして自ら滅びてよからう。

(7:16)

本節で言われている事柄は、万人がすんなりと頷けるわけではないでしょう。基本的に人間は「正しくあること」に何の咎めも持たないはずですが、コヘレトは正しさが大きくなりすぎる危険性を教えている。「義に過ぎる」と訳された部分は、原文では「正しが多くなる」というニュアンスであり、「過ぎる」は表現として少々強過ぎます。私なりにイメージしてみました。「正しさ」というコップがあり、それを満たそう満たそうとしている人間がいるのですが、ついに水が溢れるまでになってしまう。その溢れた水によって、周りにかえって被害が及んでしまうといった感じでしょう。正しくあることそのものは重要でありながら、それを追求し続けることによって、人を裁く結果に至ることが言われていると思われます。

新約聖書の中に最良の実例があります。主イエスによって再三再四糾弾された人々がいました。それは、律法学者やパリサイ人です。彼らは生き方における義を追い求めた人々でした。モーセ律法に忠実であろうとし、重箱の隅をつつくようにして律法の細則を定め、実行していた人々です。ところが、彼らが主イエス（神）の目から見て正しかったかという、その真逆を行っていたことが分かります。マタイ 23 章は、彼らの偽善を暴く主イエスの恐ろしいメッセージで満ちています。主イエスが見ておられるのは物事の表面ではなく、人の心（人を愛しているかどうか）です。

人は自分こそ正しいと考えることによって、自分よりも劣るように見える人、「できていない」ように映る人々を裁くようになる。これは信仰生活における落とし穴であり、自らを神の位置に置き、自らを神の審きの下に置いているかもしれない危険な状態と言えるでしょう。正しさは「愛」と真逆を行く可能性があるのです。神は愛であり、隣人を愛することが神を愛することだとも言われている（I ヨハネ 4:20-21）。

人を裁く者は「自ら滅びる」ということまで言われています。それは、自己義認を主張することによって神に討たれることを意味するか、あるいはこの世における「正しさ」の極みに到達できずに燃え尽きてしまうことを意味するか。いずれにせよ、「**裁くな。裁かれないためである**」（マタイ 7:1）という主の御言葉を銘記しなくてはなりません。

高橋秀典先生が書いておられる伝道者の書の翻訳と解説の本では、この箇所がタイトルとして用いられています（『正しすぎてはならない』）。人を裁くことは、「細い道」の片側にある危険な崖とすることができるでしょう。

本論 3. 大きな悪

次に見ていくのは、もう反対側にある崖です。信仰者はこちら側にも十分注意していません。

あなたは悪に過ぎてはならない。愚かであってはならない。あなたの時ではないのに、どうして死んでよかろう。(7:17)

ここでは悪を許容していくことの問題、罪に無感覚になることの問題が指摘されています。16 節で言われていた「正しすぎてはならない」という真理は、ちょっとした悪なら許容してもよいということが言われているものではありません。罪はどんなに小さな罪であっても避けるべきです。これは自分自身の問題であって、他人を裁く基準として言われているのではないことに注意しなくてはならないでしょう。自分の中で「まあいいか」と認めている自覚的な罪は、放っておくと常習化し、大きな罪に発展していくからです。

人はそれぞれ、自分の欲望に引かれ、おびき寄せられて、誘惑されるのです。そして、欲望がはらんで罪を産み、罪が熟して死を生みます。(ヤコブ 1:14-15)

初めは「悪いこと」と分かっていたことも、一回二回…と数を重ねていくことにより、だんだんとその感覚が麻痺していきます。これは悪に降伏していくことを意味し、ついには罪が熟して死を生むものとなる。

ここでのポイントとは少しズレるかもしれませんが、私たちは誰もがそのような状態になる可能性を持っていますので、罪の沼に足を取られてしまったときの這い上がり方をお伝えしておきたいと思います。それは、自分の見ている目の方向を変えること以外にはありません。人生のゴールが不明瞭であると、誘惑に心が向き始めます。神がこの人生に置いておられる目的をもう一度はっきりと確認し、そのゴールに至るために自分がしなければならないことを毎日心に刻み、そこに立って生きると宣言し続けることなのです。人生において本当に大切なことはわずかです。そこに最大限のエネルギーを注ぎ込んでいきたいと思います。

一方をつかむとともに、他方からも手を離してはならない。神を畏れる者はいずれをも避ける。(7:18)

今日の結論となる聖句です。コヘレトが読者に勧めるのは、正しくあろうとするあまり人を裁く者になることと、罪に無感覚になることの両方を避ける道です。多くの注解書では「中庸の道」と言われていますが、私はこの両者に気を配ることは必ずしも「中庸」だとは思っていません。いずれも信仰に生きるために不可欠な「バランス感覚」なのです。バランスが欠けると自転車は倒れてしまいます。つまり、神と自分の関係が悪くなるということです。自分の今の状態がどうであるかを常に見直す必要があるのです。

【結論】

今日は、正しさが溢れて人を裁く者となる危険性と、罪が熟して霊的屍となる危険性の両方を考えてきました。これらは言い換えると「人との関係」「神との関係」の両面の教えと言うことができるでしょう。人を裁くと、隣人との関係に問題が生じてくる。隠れて罪を犯し続けていると、神との関係に問題が生じてくる。広く捉えれば、いずれも神との関係を悪くしている行為となります。信仰の道は「細き道」であり、神と人との関係を常に見直し続ける歩みです。今一度、自分の生き方を省み、へりくだった心でこの週を歩み出したいと思います。常に主イエスの背中を見て歩んでいれば、崖から転落することはありません。

【祈り】

人の心を知られる神よ。私たちはどんなに表面を美しく飾っても、心の内には闇があります。神と人に隠れて考えていること、行なっていることがあります。願わくは、すべてが光とされ、暗い所が一つもない存在になりたいです。生き方において道を踏み外すことがないように、お守りください。人を裁く高ぶった思いを取り去り、常習的な罪から離れる力を与えてください。いつも聖霊に満たされ、人生のゴールをしっかりと見据えて歩み続けることができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
正しさを追い求めるあまり、自らを義とする罫より贖い給う、父なる神の愛、
罪に無感覚となった者に、人生のゴールを思い起こさせ給いし、主イエス・キリストの恵み、
信仰の細き道を歩む者に伴い、常に正道へと引き戻し給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。